三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2013,　第 33 号，57 － 60 頁

スヌーズレンの基本概念と専門資格の必要性について

姉　崎　　弘

今日国際スヌーズレン協会（ISNA）は、スヌーズレンの基本概念として「レジャー」の他に、「教育」や「セラピー」としての認識を示している。創始者の当初の「レジャー」としてのスヌーズレンの認識は、今日のスヌーズレンの一部として理解される。スヌーズレンの基本は、リラクゼーションに限定されず、対象者のもつニーズがまず初めにあって、それに応じて部屋や器材・用具を用意し、介護者（指導者）による関わり方を工夫するところにある。特に、教育やセラピーとしてのスヌーズレンを実践するためには、スヌーズレンの理論と実践に関する確かな専門性が求められることから、専門の資格の取得が必須であり、ドイツなどのような資格を認定するセミナーの開催が望まれる。今後わが国においても、スヌーズレンの資格認定制度をつくる必要がある。

キーワード：スヌーズレン、国際スヌーズレン協会、資格認定制度

1．はじめに

スヌーズレン（Snoezelen）は、1970 年代中頃にオランダの知的障害者施設ハルテンベルグセンターから始められた取組みである。重度の知的障害者から何らかの反応を引出すことをねらって、部屋やまわりの環境が見直された。この取組みは、知的障害者自身に他動的な働きかけを行うことによって、彼らの行動の変容を期待するものではなく、彼らを取り巻く環境を変えることによって、主体的な行動の変容を促すものである。すなわち、「環境」が重要なキーワードになっている。ここでは、重度の知的障害者を取り巻くまわりの環境を如何に設定するのか、如何に調整するのか、という視点が重要である。

スヌーズレンは、当初重度の知的障害者のレジャーまたはレクリエーション活動として始められた。すなわち、彼らが興味を持ちそうな感覚刺激器材を用意して、いくつかの部屋にそれらの感覚刺激器材をテーマに沿って配置させることで、各部屋を特徴づけた。このようにして、ハルテンベルグセンターの建物の中に、ホワイトルーム、ボールプールルーム、アクティビィティルーム、触覚・嗅覚刺激の廊下などが造られた。

スヌーズレンは、これまでまず部屋と器材が用意されていて、障害者などが自分の好きな部屋や器材を選択して楽しく過ごせるというレジャーとして認識されてきた。日本スヌーズレン協会のホームページには「どんなに障害が重い人たちでも楽しめるように、光、音、におい、振動、温度、触覚の素材、こんなものを組み合わせたトータルリラグゼーションの部屋が生まれました。出来上がった部屋は、障害を持つ人のみならず、その傍らにいる、介助者にとっても心地いい空間となりました。スヌーズレンは、治療法でも、教育法でもありません。どんな人でも、ありのままの自分が受け止められ、自分で選び、自分のペースで楽しむための、人生の大切な時間です」[1]と、レジャーとしてのスヌーズレンについて説明している。

しかし、スヌーズレンには果たしてこのような使い方しかないのであろうか。国際スヌーズレン協会（International Snoezelen Association: ISNA）はスヌーズレンの定義を以下のように示している。「多重感覚環境（Multi Sensory Environment: MSE）/スヌーズレンとは、利用者、介助者、そして複数の感覚刺激を提供する環境との継続的でデリケートな関係に基づいて構築された知的に豊かな活動です。MSE/スヌーズレンは、1970 年代半ばに誕生し、現在では世界中で実践されており、生活の質的向上に関する倫理的な原則に基づいています。共感に基づく手法であるスヌーズレンは、レジャー、セラピー、教育などの分野に適用されており、認知症や自閉症など、特別な介護を必要とする人々だけでなく、あらゆる人々が楽しめる空間で実践されています」[2]。このように今日世界では、スヌーズレンは、レジャーとしてだけではなく、セラピーや教育としても活用されているのが現状である。スヌーズレンがレジャーだけであるとするならば、スヌーズレンの適用範囲は狭くなり、今日のように世界中に広がらなかったのではないかと思われる。

そこで本稿では、まずスヌーズレンの基本概念を検討し、さらにスヌーズレンを考察する際の基本的な枠組みとされる、いわゆる、スヌーズレンにおける「指導法・実践法の三角形」について考察し、その専門資格の必要性について検討することを目的とした。

三重大学教育学部特別支援教育講座

2．創始者の説とその限界

創始者のフェアフール（Verheul,A）らは、スヌーズレンをリラクゼーションを主としたレジャー活動として始めた[3]。当時フェアフールらの考案した各種の光刺激機材等は画期的なものであり、世界的に高く評価されている[4]。このことにより、対象者の表情や行動面に、これまでに見られなかったよい反応が表れ、彼らの保護者によって喜んで受け入れられたといわれる[5]。

創始者の当初のスローガンは「嫌なことはしなくてもいい、好きなことをしていいんだよ」というものである[6]。すなわち、この取組みは、利用する本人の自由にまかせることを第一に重要視した発想である。それは、楽しく過ごすことを目的としているが、それ以上のものではない。このことは、利用者自身のもつレジャー活動への欲求は満たされるが、それ以外の本人のもつさまざまなニーズには十分に応えきれない。したがって、この創始者のスローガンには、本人のニーズという観点から見るならば、十分には応えきれず限界があるといえる。

3．今日のスヌーズレンの基本概念

例えば、自分の部屋で、好きな音楽のCDをかけながらコーヒーを飲むのは、くつろぎのひと時であり、レジャー活動といえるが、このように一人で個人的に楽しむ活動はスヌーズレンではない。このような個人的なレジャーとしての過ごし方はスヌーズレンとはいえないのである。

スヌーズレンと呼ぶためには、必ず利用者（対象者）がいて、部屋や器材・用具の用意があり、そこに介護者や指導者が必ず必要である[2]。この三者間の相互作用がスヌーズレンであり、基本となる共感的な関わりを通して、心地よさを感じとることが重視される。

スヌーズレンは、この三者間の相互作用を原則としていることから、例えば、対象者として障害児や病人がいた場合には、そのそばに寄り添う教師やセラピストが、対象者のもつ教育ニーズや治療ニーズに応じて、障害児の発達を促す教育や病人の病気を治療するセラピーとしてのスヌーズレンを行うことができるのである。

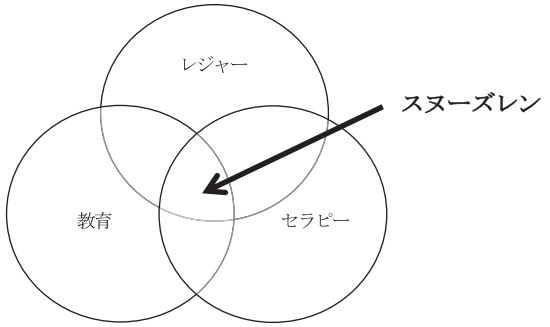

図1　スヌーズレンの概念図（姉崎 2007 p101）

スヌーズレンの基本概念は、「レジャー」の他に、「教育」や「セラピー」としての側面を併せ持つと考えられる。つまりスヌーズレンの指導（治療）目標の設定と指導（治療）の評価や改善を図る必要がある。筆者は、スヌーズレンの概念を図1に示すようにとらえている（姉崎，2007）[7]。

4．マーテンスの「スヌーズレンの指導法・実践法の三角形」による再検討の必要性

マーテンス（2008）は、スヌーズレンの第3番目の著書の中で、いわゆる、スヌーズレンの「指導法・実践法の三角形」[8]の重要性について述べている。

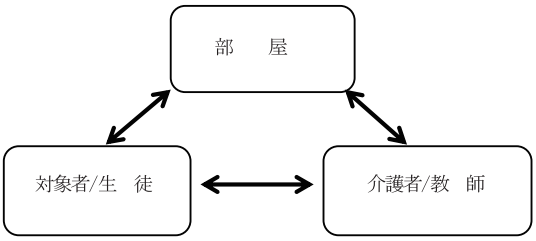

図2　スヌーズレンの指導法・実践法の三角形
（Mertens, 2008 p13）

マーテンスは、図2を示して、スヌーズレンをより普遍的にとらえ直した。その基本は、対象者のニーズがまず初めにあって、そのニーズに応じて部屋や器材・用具を用意し、介護者（指導者）による関わり方を工夫するところにある。

もしも対象者のニーズがレジャーにあるならば、対象者は基本的にこの部屋で自由に楽しく過ごすことができる。この場合には、対象者の安全面に十分気を付けて見守る必要があるが、介護者や指導者は必ずしも必要ではない。

しかし、発達途上にある子どもや障害者、病人にとっては、レジャーとしての取組みだけではそのニーズに十分に応じきれないのは明らかである。そこには、教育を専門にする教師や治療を専門にするセラピストなどの存在が必要となる。この場合には、対象者の発達ニーズや治療ニーズに応じて、部屋や必要な器材などを用意し、セッションを構造化し、対象者への関わり方を工夫することが求められる。

レジャーとしてスヌーズレンを行う場合には、対象者はその場を自分を中心に自由に楽しく過ごすことができ、そばにいる介護者等にはスヌーズレンの専門資格は必ずしも必要ないかもしれない。しかし、スヌーズレンを教育やセラピーを目的として用いる場合には、より専門的な知識や技能が求められることから必ず専門の資格が必要となる。そしてそのためのスヌーズレンの資格認定セミナーの受講と資格の取得が必須条件である[9]。

すなわち、教育やセラピーとしてスヌーズレンを実践する人びとは、主に、教師やセラピスト、医師、看護師、介護福祉士などの基礎資格をすでに取得済みの人たちであり、この基礎資格の上にさらに、スヌーズレンの理論や実践に関する専門セミナーの講座の受講を修了した上で、はじめてスヌーズレンの教育やセラピーを実践することができるのである。ただ、「部屋を用意して、器材を配置すればそれでいい、後は自由に使用して下さい、リラックスして下さい」、というものではないのである。

対象者のニーズに応じて、スヌーズレンの部屋や器材・用具を用いて、どのように対象者に関わっていけばよいのか、どのようにセッションや指導を展開したら、教育として、またセラピーとして効果的かを、スヌーズレンの理論と実践に関するセミナーの受講を通じて、深く学んでいく必要があるといえる。

5．自発的な動きを引き出す「スヌーズレンによる教育」の具体的な実践例の分析から

以下は、スヌーズレンによる教育場面の実際のセッションの様子の紹介である。

対象児はA児、5歳の重度・重複障害児。寝たきりで教室での学習活動では自発的な動きが乏しい。筆者と対象児の1対1によるスヌーズレンによる教育をある施設で実施した。A児の自発的な動きを引き出すことをスヌーズレンでの教育の目標とした。6畳くらいの広さの部屋をスヌーズレンルームとして使用した。1セッションの時間はおよそ20分間である。A児はビーズクッションの上に横になっている。部屋を徐々に薄暗くしていき、子ども用のスヌーズレン音楽を軽く流し、スイートオレンジのアロマテラピーを用い、A児を壁の方に向けて、壁にはソーラープロジェクターの映像（ロケットと花火）とミラーボールの光が映し出されていた。

最初A児は、この空間の中で、プロジェクターの映像をしばらくよく注視していたので、次に空間設定を替えて、ソーラープロジェクターとミラーボールの代わりに、光ファイバーとバブルチューブを用いた空間に設定した。A児は特に、右手に見える光ファイバーを少し離れた位置からよく注視していたので、それに興味があると解釈して、筆者が光ファイバーの束を手に持って、A児の顔のそばまでゆっくり近づけていったところ、A児はしばらくしてゆっくりと右手を動かして、光ファイバーの束の中から右手の親指と人差し指を使って光ファイバーを1本つまみあげ、それを右目の近くに近づけてよーく見たり、右手を使って何度も光の束からつまみ直す動作が見られた。A児のそばにいた筆者は、少し時間を空けてA児の自発的な活動に共感しながら「きれいだね」「赤くなったね」「じょうずだね」といった言葉かけを行った。

このように、スヌーズレンの空間を設定して、A児の自由にまかせただけではA児の自発的な動きを引き出すことは難しい。A児の興味・関心に基づいて、指導者（筆者）がA児を取り巻く空間を設定し直したり、器材の提示の仕方を工夫したことで、A児の自発的な手の動きを引き出すことができたのである。特にここでは、以下のような器材の提示方法を工夫した。光ファイバーは、A児がビーズクッションに横になった姿勢でも、ちょうど視界に入りやすいように、縦長3段のカラーボックスの最上段のボックスの位置に穴をあけて、そこから光ファイバーの束をたらすことで、A児の目線よりも少し高い位置から光ファイバーの全体像が見えるように配慮した。そうすることで、A児の視野に光ファイバーが効果的に見えるように工夫を凝らした。そして光ファイバーをさわれるように、筆者がA児のそばまでゆっくりと近づけていった。このようなきめの細かな準備を行った成果であると思われる。

スヌーズレンによる教育では、対象児のまわりにまず仮の空間を設定して、対象児の様子をつぶさに観察することで、どのような刺激や器材などに興味や関心があるのか、またその刺激や器材などをどのように提示したら、より効果的か、さらにどのようにセッションを展開したらより教育的かなどを検討した上で、再度、対象児のもつ発達ニーズに応じた空間設定の見直しと修正や教師の関わり方の工夫を行うことが何よりも重要である。そして定期的に、対象児の行動の観察と評価、さらに授業全体の評価と見直しが必要である。そのためには、定期的にセッションをVTR録画し、職員間でセッションの場面をVTRを再生して評価表を用いた評価と反省、次回のセッションに向けての改善策の検討が不可欠である[10]。このような対象児の発達を促したり、発達を支援したりするスヌーズレンによる教育を実践するためには、より専門的なセミナーへの参加が不可欠である。

6．スヌーズレンの資格認定制度と資格認定セミナー開催の必要性

マーテンスの示した「スヌーズレンの指導法・実践法の三角形」によれば、創始者のフェアフールらの考案したレジャーとしてのスヌーズレンの実践は、今日のスヌーズレンの全体像から見た場合には、スヌーズレンの一部をとらえて実践したものと理解されるのである。フェアフールは、知的障害者施設の指導員であり実践家であったことから、スヌーズレンを理論的に体系化することはしていない[11]。

スヌーズレンは、あくまでも利用者（対象者）のもつニーズに基づいた実践が基本であることは明白である。利用者のニーズに基づいて、レジャーとして、あるいは

教育やセラピーとして、スヌーズレンのさまざまな実践を行うことが肝要である。

ただし、教育やセラピーとしてスヌーズレンを実践するためには、高度の専門性が求められることから、専門の資格の取得が必須であり、そのための資格を認定するセミナーの開催が望まれる。またそのためのスヌーズレンの資格制度をつくる必要がある。マーテンスは、すでにドイツにおいて、国際的なスヌーズレンの「追加資格取得」[注)]のための制度を創設し、毎年ドイツをはじめ世界各国でスヌーズレンの資格認定セミナーを開催している[12)]。わが国においても、この資格認定制度の創設と資格認定セミナーの開催が切に望まれる。

注）

教師や医師、看護師、理学療法士、作業療法士、介護福祉士などの資格をすでに取得済の上に、さらに追加してスヌーズレンの資格を取得することをいう。

文献および資料

1）日本スヌーズレン協会　スヌーズレンとは　http://snoezelen.jp/snoezelen.html（参照 2012.11.14）

2）International Snoezelen Association（ISNA）What is Snoezelen ? http://www.isna-mse.org/view/3（参照 2012.11.14）

3）Hulsegge, J & Verheul, A（1987）Snoezelen another world. ROMPA, 14, 121.

4）国際スヌーズレン協会日本支部・全日本スヌーズレン研究会　スヌーズレンとは http://www.isna-mse.jp/gaiyou.html（参照 2012.11.14）

5）Mertens, K（2003）Snoezelen - Eine Einführung in die Praxis. 姉崎　弘（監訳）（2009）　スヌーズレンの基礎理論と実際 ― 心を癒す多重感覚環境の世界 ―. 大学教育出版, 2.

6）Hulsegge, J & Verheul, A（1997）Snoezelen -Eine andere Welt. Bundesvereinigung Lebenshilfe für geistig Behinderte（Hrsg.）. Lebenshilfe-Verlag, Marburg, 11.

7）姉崎　弘（2007）英国の Special School における Snoezelen の教育実践に関する調査研究 ― Snoezelen の概念をめぐって ―. 三重大学教育学部研究紀要（教育科学）, 58：99-105.

8）Mertens, K（2008）Snoezelen -Eintauchen in eine andere Welt- verlag modernes lernen, 13.

9）姉崎　弘（編者）（2012）　スヌーズレンの基本的な理解 ― マーテンス博士の講演「世界のスヌーズレン」―. 国際スヌーズレン協会日本支部, 16-17.

10）姉崎　弘（2002）　養護学校教師の指導技能を高める研修方法の開発と有効性の検討. 特殊教育学研究, 40（3）, 303-311.

11）前掲書 3）　127.

12）前掲書 9）